

尻無城跡

1991

瑞穂町文化財保護協会

尻無城跡

—新農業構造改善事業に係る栗林農道整備事業に伴う調査—



1991

瑞穂町文化財保護協会

発刊にあたって

瑞穂町には七つの城跡が伝えられている。①尻無城（通称古城） ②伊古城（中世）
③杉峰城（中世） ④大河城（中世） ⑤高田城（中世） ⑥岡城（中世 別名夏峰城）
⑦鍵峰城（中世 別名宿城）である。いずれも中世の城跡であり、城廻の規模や様子は
まったくわかっていない。

中でも、尻無城については、城主が誰であったかすら不明である。このたび新農業構
造改善事業基盤整備栗林農道整備事業のため、県文化課に緊急発掘調査を依頼した。中
世の城がどんなものであったか、その一部でも解明できればというほのかな期待もあつ
た。しかし城跡の周辺部分であったため、本体にふれることなく終ったことは残念でも
あったが、後の報告書に示されるように、縄文晩期の土器片の出土により、かなり古く
から先人の生活の営みがあったことは驚きの一つである。

かつて、古城には「金櫃が埋まっているそうだ」という噂話もあった。噂もロマンと
して、後世に残しておきたい。

終りに、本書を発刊するにあたり、発掘調査の指導、整理と執筆に当たられた県文化
課の方々に心から感謝の意を表します。

平成3年3月30日

瑞穂町文化財保護協会会長

小川 雄幸

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の歴史的地理的位置	2
III 調査	4
(1)試掘調査の概要	4
(2)本調査の概要	5
①土層	5
②遺構	6
③遺物	7
縄文時代の遺物	7
弥生時代の遺物	9
古墳時代の遺物	9
中世の遺物	10
近世の遺物	15
IV まとめ	17

挿図目次

第1図 尻無城の位置と周辺の中世城跡分布図	2
第2図 調査区配図	4
第3図 土層実測図	6
第4図 A・B区遺構・遺物出土状況図	7
第5図 中世石垣状遺構検出状況図	7
第6図 石垣状遺構実測図①	8
第7図 ノ ②	8
第8図 縄文時代・弥生時代の遺物	9
第9図 古墳時代の遺物実測図	10
第10図 中世の遺物(須恵質土器)実測図	11
第11図 ノ (瓦質土器)実測図	12
第12図 ノ (土師器)実測図	13
第13図 陶器および輸入陶磁器実測図	14

第14図 土鍤実測図	16
第15図 近世の遺物実測図	16

図版目次

図版1 遺跡遠景および遺跡近景	21
図版2 中世石垣状遺構検出状況	22
図版3 //	23
図版4 A区土層・遺物出土状況およびB区近世遺構検出状況	24
図版5 出土遺物①	25
図版6 //	26
図版7 //	27
図版8 //	28
図版9 //	29

例　　言

- 1 本書は平成2年度に実施した、南高来郡瑞穂町西郷甲に所在する尻無城跡の調査報告書である。
- 2 調査は瑞穂町文化財保護協会が主体となり、依頼により長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
- 3 調査関係者は次のとおりである。

瑞穂町文化財保護協会 会長	小川 雄幸
瑞穂町教育委員会 社会教育主事	長田 幸男
長崎県教育庁文化課 調査係長（副参事）	田川 繁
// 主任文化財保護主事	安楽 勉
// 文化財調査員	小野ゆかり
- 4 本書の遺物実測・写真撮影については、寺田正剛と下田章吾の協力を得た。
- 5 本調査に関する写真・実測図については安楽・小野による。
- 6 出土遺物、実測図類については報告書刊行後、町資料館に返還の予定である。
- 7 本書の執筆および編集は安楽による。

I 調査に至る経緯

尻無城跡は、雲仙山麓が北側に放射状に伸び、有明海に没する丘陵先端部の標高12m～15mに位置する。丘陵中央は東の国見町と境を接し、城跡の大部分は国見町側に広がりをもつ。

これまで、遺跡の乗る丘陵地には幅1m程度の道路があるだけで、道路拡幅の要望が出されていた。そこで瑞穂町では、国道251号線から島原鉄道を越えて南へ伸びる栗林農道1号線の計画に着手した。

しかし、この地区は古くから「尻無城」又は「古城」の地名で呼ばれた城跡が所在することが知られていた。昭和58年の詳細分布調査では、表面から中世の遺物や、黒曜石片などが採集され、中世の城跡であることが判明した。しかし文献的な手がかりはなく、城の出自についても不明である。周辺の状況から考えると、尻無城から東へ500m程の所に、神代式部貴益が正和元年(1312年)海に突出した自然の地形を利用して築いた、広い面積を有する神代城(鶴龟城)が位置する。現在は水田になっているが、当時は城の間に海が入り込み、近世になり干拓されている。本遺跡はその神代城の出城の役割を担っていたという説も考えられている。

農道は、狭い尾根中央に位置するため、計画変更が出来ず、試掘調査を実施することになった。第1次の試掘調査は、平成元年7月17日～7月22日の6日間で道路建設予定地内の長さ300mの間に限定し、試掘調査場(TP)を11箇所設定した。その結果、西側縁辺部からわずかな遺物が出土したが、主体となる部分ではなく、その他の試掘場でも殆ど遺物の出土はなく、農道工事着工は差しつかないと判断がなされた。

道路工事は着工され、年度末までには舗装工を除いて道路は出来上がった。平成3年度になると、また新しい問題が起ってきた。それは台地先端部に位置する土地所有者から、取付け道路の要望が出され、町境を中心に建設が具体化されたことである。ここも計画の見直しは出来ず、第2次の試掘調査を行うことになった。取付け道路は空濠のすぐ手前、祠のある地点から東へ20mはいり、さらに直角に北へ端部までの全長111m、幅4mの規模である。試掘調査は平成2年6月11日～6月16日まで実施され、試掘場を8箇所設定し、その結果5箇所で遺構および遺物の出土を見た。

本調査は試掘調査で得られた結果を基に8箇所、面積170m²を調査した。期間は平成2年10月8日～10月19日までの10日間を行い、城の遺構と考えられる礫が集中する部分や、中世の遺物それに若干の繩文時代～古墳時代の土器などが得られた。

なお調査終了後は道路工事が着工され、現在は完工している。道路は城跡の西側部分に片寄って作られたため、主要な平坦部分はそのまま旧状を保っているが、行政的には国見町側に大部分が属しており、今後、開発による保護策を考える必要がある。

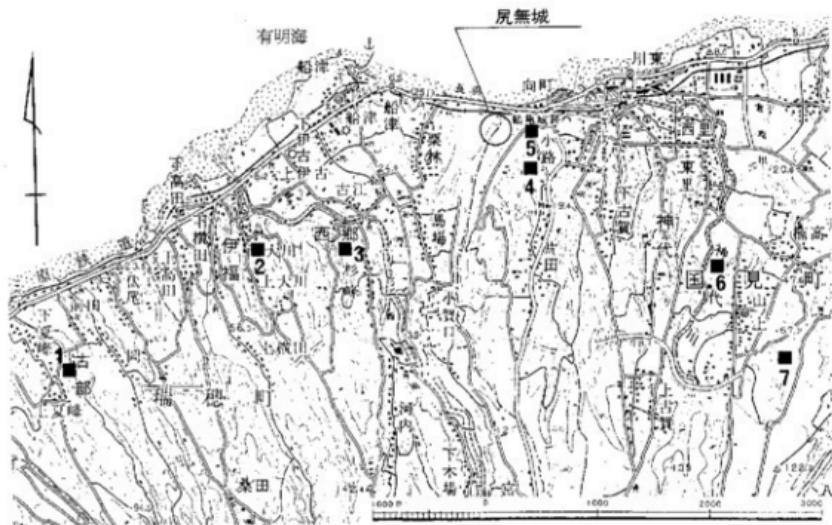
II 遺跡の歴史的地理的位置

中央に雲峰・雲仙岳をいただく島原半島は、火山性扇状地が発達し、各地に肥沃な平野部が大小の河川を中心として折れている。そのため遺跡の数も標高の高山麓部から海岸部まで変化の富んだ展開を示している。

ここでは中世という遺跡の性格上、周辺の城跡を中心に成立の背景などについて概観してみる。各地に在地領主による勢力の拡大が見られるのは鎌倉時代以降であるが、半島一帯に基盤を築く基になったものは、県下でもっとも多くの城郭が成立していた地域であることでもうなずける。

鎌倉幕府成立後所在地領主として、高来郡内では安徳（深江町）・西郷・大河・伊古（瑞穂町）・伊佐早（諫早市）の名前が見える程度にすぎない。

南北朝以降になると、あわただしい情勢を反映して各地に城郭が築造され、80箇所前後が見られる。その中で勢力を誇った主要なものは、まず有馬氏があげられる。有馬氏は日之江城（北有馬町）・原城（南有馬町）を有し、大きな影響力をもつた。また尻無城に最も隣接する神代城



1. 岡城 2. 大川城 3. 杉峰城 4. 長浜城 5. 神代城（鶴亀城）
6. 大坪城 7. 浅井城

第1図 尻無城の位置と周辺の中世城跡分布図

(鍋龜城) (国見町) には神代氏が、西側には西郷氏が杉峰城(瑞穂町)に拠っていた。

南北朝時代から戦国時代初期は、有馬氏の絶頂期にあたり、その勢力は高米・彼杵・杵島・松浦・藤津の広い範囲にわたっている。しかし天正年代以降は佐賀の龍造寺隆信が急速に台頭するに及んで勢力のおとろえが目立つようになる。

さて尻無城は、先に神代城の出城とも言われていることを述べたが、ここで神代城にふれておく。城郭は有明海に突出した丘陵端部の広い平坦地を利用し現在畑地となり旧状をよくとどめている。ただ木丸は神社が建てられている。満潮時には三方を海に囲まれ、戦略的に海上交通の上からも要衝の位置を占めていたと考えられる。ここには神代式部貴益が居している。神代氏は龍造寺側に立ち、有馬氏と対立するようになり、沖田職の戦いでも龍造寺は数万の兵を送り、この城を本陣としている。しかしこの戦いで龍造寺隆信は敗れ討死している。また神代城をとりまく浅井城には、浅井七郎貴安、大坪城には大坪太郎、古部の岡城には家人の佐藤、庄司などの名前が見える。これらの城主は神代氏と一緒にになっているが、神代氏も有馬氏によって暗殺され終りをつけている。その後に至っては鍋島氏の飛地として神代鍋島氏の陣屋敷が置かれ、現在でも当時の面影を残している。

杉峰城は別名西郷城とも呼ばれ、瑞穂町の西郷川下流西側の標高34m~40m付近に位置する。ここも雲仙山麓が放射状に伸びた丘陵先端部にあたり、有明海より内陸部に入っている。城主は西郷氏であるが、出自は不明である。南北朝時代には城はすでに築かれていたようで、現在でも城の旧状はよくとどめている。『北肥戰誌』によれば、城主の西郷次郎が南朝方として守っていた。そこに九州探題一色範氏が観応三年に小保氏連を彼件・高来両郡の南朝方の攻撃に派遣した時杉峰城を落城させたという。

岡城は別名夏峰城とも呼ばれ、舟津川の上流、下夏峰と上夏峰の間標高30m~35mに位置する。海岸からやや内陸の丘陵端部に在り前述の城跡と同様の地形を有する。岡城主は神代貢茂の弟で岡刑部貴明といわれ、神代城の支城鍵峰城と共に神代領の北口守る城として重要な役割をもっている。しかし、この城も有馬氏の攻撃を受け落城している。

こうして周辺の城跡を見てくると、有馬氏対龍造寺の対立の構図の中で城が築造されていることが窺える。その中核をなすものは神代城であり、規模からしても堂々のものである。杉峰城との関係は不明な点もあるが、どちらも南朝方に組んでいることからも、同盟関係はあったと思われる。

支城の役割しか担っていなかったと思われる尻無城や長浜城は、城の出自などについては文献なども乏しい限りである。城跡の殆どは年代的裏付けもなされないままであるが、発掘調査と文献の両方からの系統立てた調査によって地域的なつながりも解明されると思われる。

参考文献

外山幹夫編 『日本城郭大系』17 長崎・佐賀 新人物往来社 1977

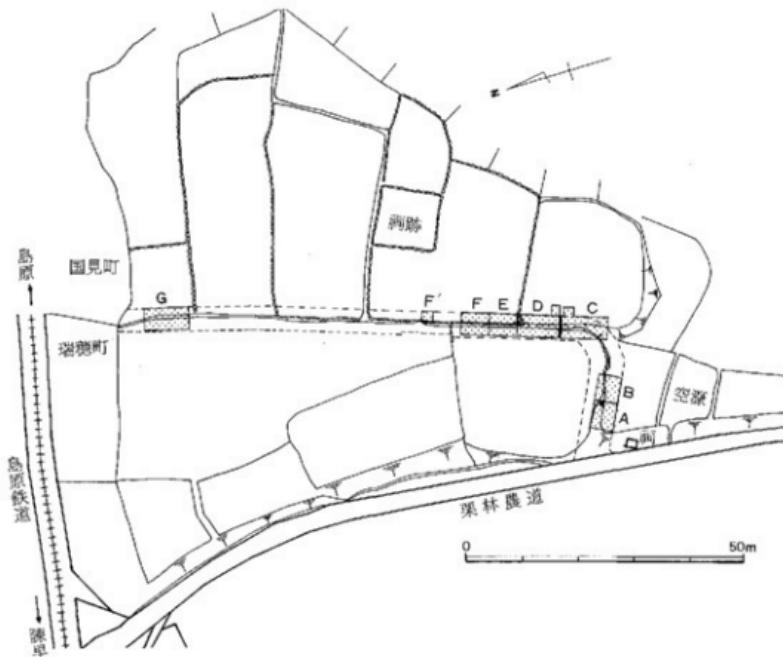
『国見町郷土誌』国見町 1984

III 調 査

(1) 試掘調査の概要

尻無城の調査は、2回の試掘調査と本調査に分けられる。第1回の試掘調査では、島原鉄道によって先端が削られている部分から上方へ約300mの範囲について行った。従来城跡の範囲は、端部から100m上った地点に空濠が位置し、このあたりまでだらうと推測されていた。しかし、上方では、五輪塔などの供養碑があったといわれたことや、中世の土器片などが散在していたからである。

試掘の結果は、TP 1・2では、台地端部の西側縁辺部にあたり、土層は1層から5層がほぼ整然と観察出来る。その中で、2層の黄褐色土層からは中世の土師皿片が出土し、3層の黒色土層からは、蛇文岩製の石斧片が出上、繩文時代の層と考えられる。TP 3・4は空濠の西側に設定した。表土層のすぐ下は地山層の岩盤で遺物は認められなかった。TP 6は細い道路と畑に接して設定したが畑地部分はすぐ地山、道路部分は近世以降に埋められて作られたこと



第2図 調査区配図

が判明した。TP 7~11は、黒色土層がわずかに残り、TP 9ではサヌカイト剝片と黒曜石剝片、輸入陶磁片が若干出土したが、みかんや生垣の植栽により擾乱を受け、遺物包含層として侃えることが出来ない状況であった。

取付道路の試掘調査は予定地内に8箇所のTPを設定した。TP 1では小高いたかまりの部分に入れたが埋め上がり厚く堆積し、その下部III層の黒色粘質土層とIV層の暗褐色粘質土層より縄文晩期の土器が数点出土した。TP 2は上部は攪乱を受けているが、下層はTP 1と同じ状況である。TP 3は畑の西側縁辺の土手の部分であるが、II層より礫の集中が見られた。なかには大礫も混じり、城の遺構の一部を発見するものであった。TP 4~6は地山層がすぐに現われ遺構・遺物は認められなかった。TP 7・8は丘陵端部に近い所に設定した。ここでは地山部分は深くなっている、III層の暗褐色粘質土中に柱穴状の掘り込みが認められている。

(2)本調査の概要

試掘調査の結果をふまえて、本調査は取付道路部分に限った。埋め土が厚い部分は機械によつて剝いた。調査の結果は、ほぼ試掘調査のデータと一致するものであったが、TP 3で確認された遺構は大規模なものとなった。また端部で確認された柱穴状の遺構は調査面積が狭いこともあり関連性は見いだせなかった。

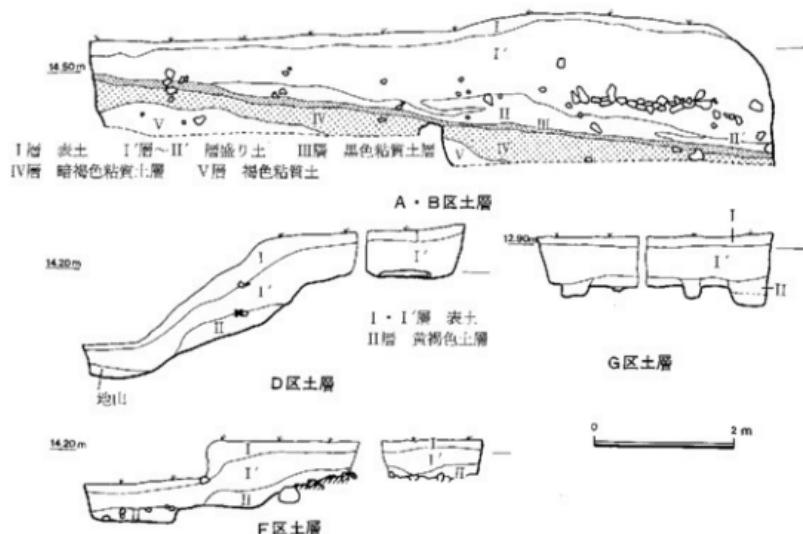
遺物が出土した試掘場を中心に土層および遺構・遺物について説明を加えていく。

①土 層

本調査ではA~Gまで8箇所の設定を行った。先ずA・B区の土層はV層まで見られるもののI・II層は埋め土である。一番厚い所で1.5mである。褐色のさらりとした土質に小礫の混じるものと、大礫と小礫の混じり合ったものに区別されるが、はっきりとしていない。最初は墳墓の高まりとも考えられたがそうでもないことが判った。III層は黒色粘質土層である。10~15cmの薄い層で縄文晩期の土器を包含する。IV層は暗褐色粘質土、ややさらりとしており上部に晩期の土器が含まれる。V層は褐色粘質でやや黄色をおびる。地山層直上で無遺物層。III層以下の層位を見れば、現在の旧地形は、西側にかなりの傾斜をもっていたことが窺え、中世の時期に平坦化された可能性も考えられる。

中世の石垣状遺構は、II層の黄褐色土層を掘り込んでおり、土層の安定した部分に石を積みあげている。中世の遺構が見られない北側になると、耕作土層の下にすぐ地山層が見られ、遺構や遺物の包含はない。

台地先端部ではII層褐色粘質土層から若干の中世遺物が出土し、III層の暗褐色粘質土層を掘り込み柱穴や掘り込みの遺構が見られた。この地区は地山まで深くIV層黄褐色土層が岩盤の上に乗る。



第3図 土層実測図

②遺構

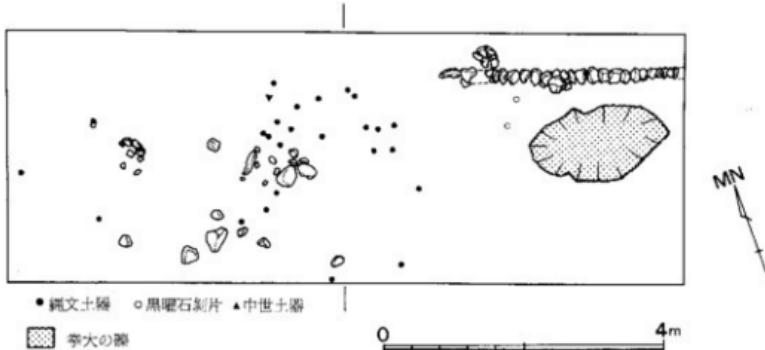
今回検出された遺構は、城の遺構につながると考えられる石垣状の礫群と、近世のものと考えられる集石土壙、それに柱穴があげられる。いずれも限られた面積での調査であり、遺構の性格を確定するまでには至っていない。

近世集石土壙

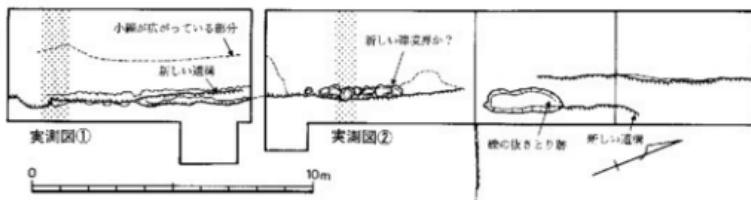
B区のII層からIII層を掘り込み、その中に拳大の礫が入れ込まれている。礫はしまりがなく中世土器と近世土器が混入していた。長径2m、短径1m深さは15cm程度で形状は橢円に近い。土壤基に近いが、全体的に浅い。またこれに関連するか不明であるが、すぐ北側に拳大より少し大きな礫が東西に一列に並ぶ。他の境界石とも考えられるがそれを裏付けるものはない。

中世石垣状遺構

平坦な方形に区画された畑の西側縁片部に礫群が検出された。隣接する畑地との比高差は約2.5m程あり、この傾斜した部分に、近世の境界と思われる大礫が一列並び、中世の石垣、あるいは道路状と思われる石敷が集中してみられる。遺構は平坦面と傾斜を接する部分に大礫を並べ、東側は平面的に石が敷かれたような状況が見られる。傾斜地の石は上から落ち込んだものと思われるが、量が多い所もある。この礫群に混じって、中世の遺物が点在することからしても、遺構の時期は同時期に比定されよう。



第4図 A・B区遺構・遺物出土状況図



第5図 中世石垣状遺構検出状況図

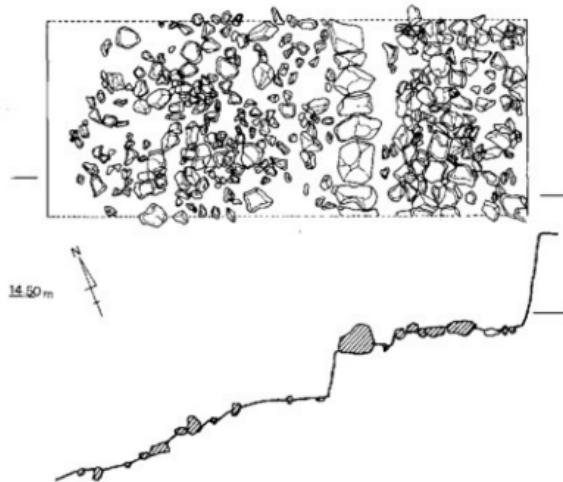
③遺 物

調査による遺物の出土は、縄文時代から近世にまで及んでいる。しかし量的な面から見ると多い訳ではない。時代的な内訳では、中世の遺物が一番多く、縄文時代や古墳時代のものは数える程度である。

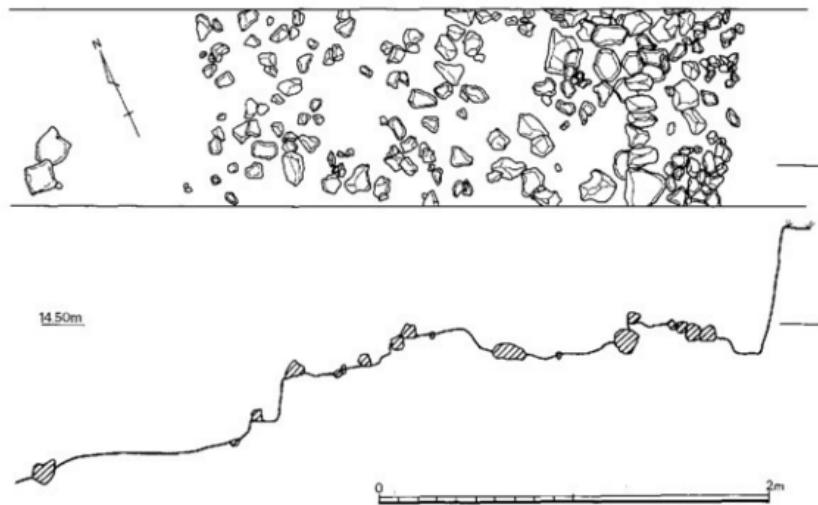
以下時代別に概観してみる。

縄文時代の遺物（第8図1～8）

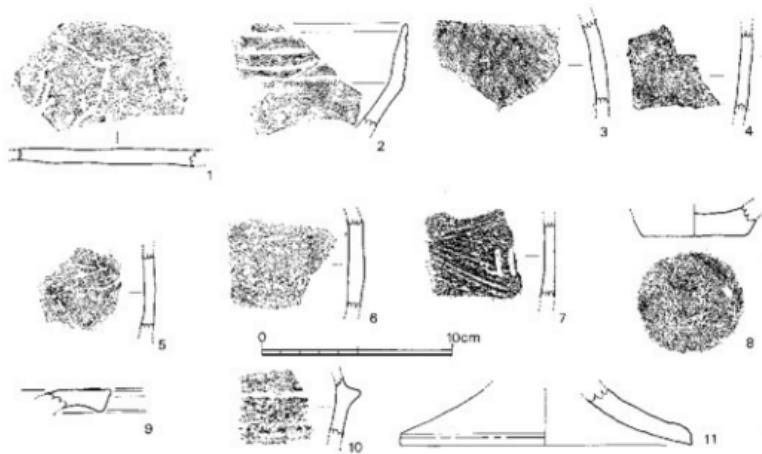
縄文時代の遺物はA区IV層からの出土が殆どである。台地全体では黒曜石剝片類が多く見られるが、A区以外では層位からまとまって出土はしていない。1は茶褐色の胎土に多くの滑石を含んだ扁平な土器片で、おそらく中期阿高式系の土器であろう。2から8は晩期の精製研磨鉢形土器である。2は「く」字型に曲がった口縁に4本の沈線が入る。内外面は荒で磨かれて



第6図 石垣状遺構実測図①



第7図 石垣状遺構実測図②



第8図 繩文時代・弥生時代の遺物実測図

いる。他の破片も鏡で磨かれ同一固体と考えられる。6・7は半精製土器、7はわずかに条痕が残り、8は底部である。時期的には晩期初頭に比定できよう。

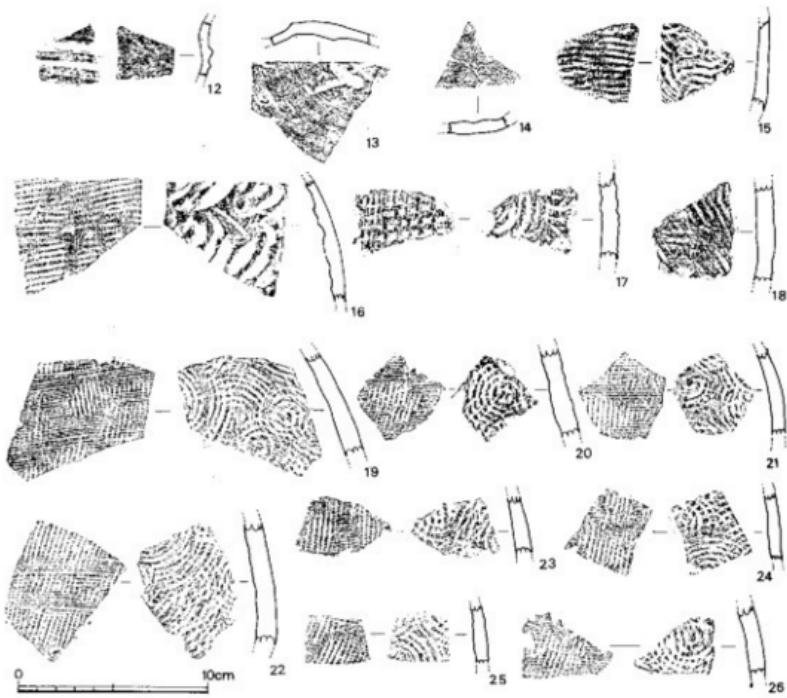
弥生時代の遺物（第8図9～11）

弥生土器は僅か3点である。9は壺口縁と思われる破片で丹が塗布されている。口唇は幅1cmで中央が凹んでいる。10は胴部に断面三角形の貼り付け突帯が付く破片である。11は高环脚部で下端部は僅かに凹んでいる。胎土には霞母を含む。小破片で断定は出来ないが、中期以降の所産であろう。

古墳時代の遺物（第9図12～26）

石垣状の陳群に混じって20数点の須恵器が出土している。なかには中世須恵器と区別困難なものもある。12は小破片で全体の器形を窺い得ないが、うす手、緻密でシャープな造りである。2段の突起は段階上に削り出され、櫛歯による波状がわずかに残る。内面は自然釉が見られ断面は紫がかかった褐色を呈する。おそらく半島系の土器と考えられる。

13・14は坏蓋の部分、15～18は壺胴部片で、内面は同心円叩きで共通しているが、外面は格子目叩きのあとに刷毛目による調整が行われている。15は平行条痕叩きのあと刷毛目調整、17は粗い格子目叩きが見られる。19～26は内面の同心円文叩きと外面は平行条痕文叩きのあと、刷毛目で部分的に消している。須恵器の出土については、古墳の所在が考えられるが、現在この丘陵には見られない。しかし、周辺の丘陵上には6世纪以降の円墳の所在は多く見られること



第9図 古墳時代の遺物実測図

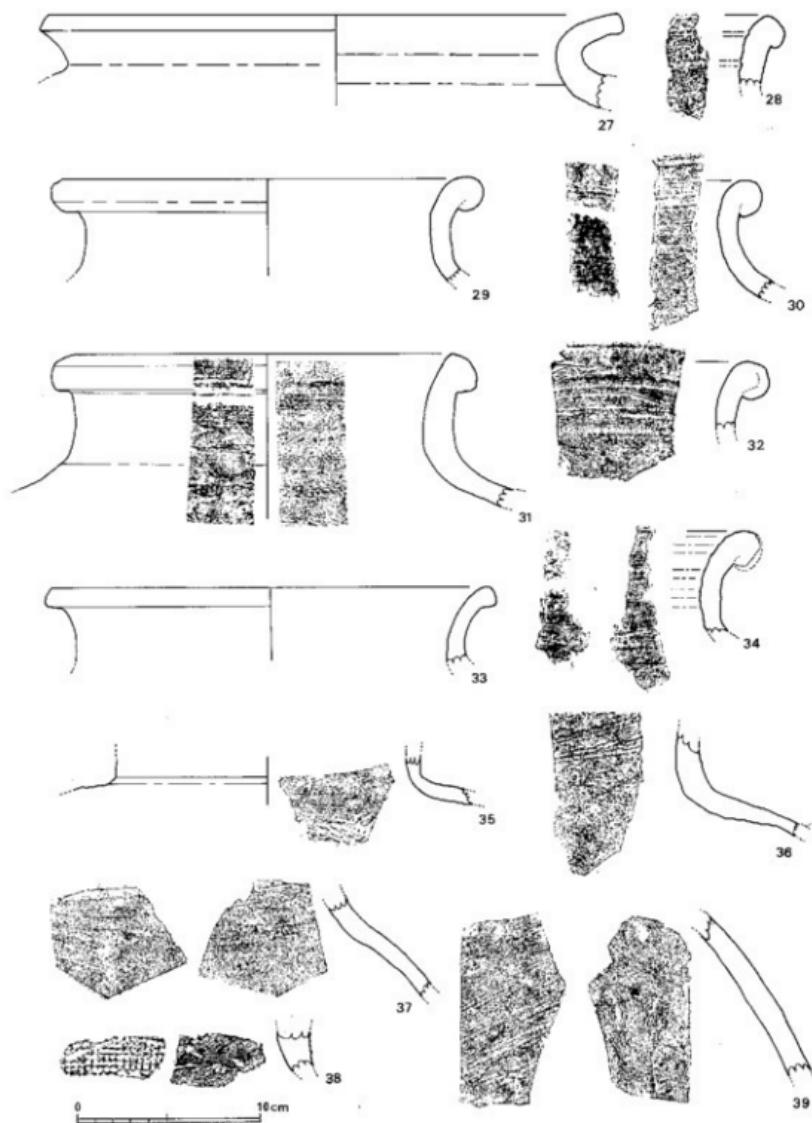
から、この周辺にも所在していた可能性は強いのである。

中世の遺物（第10～14図）

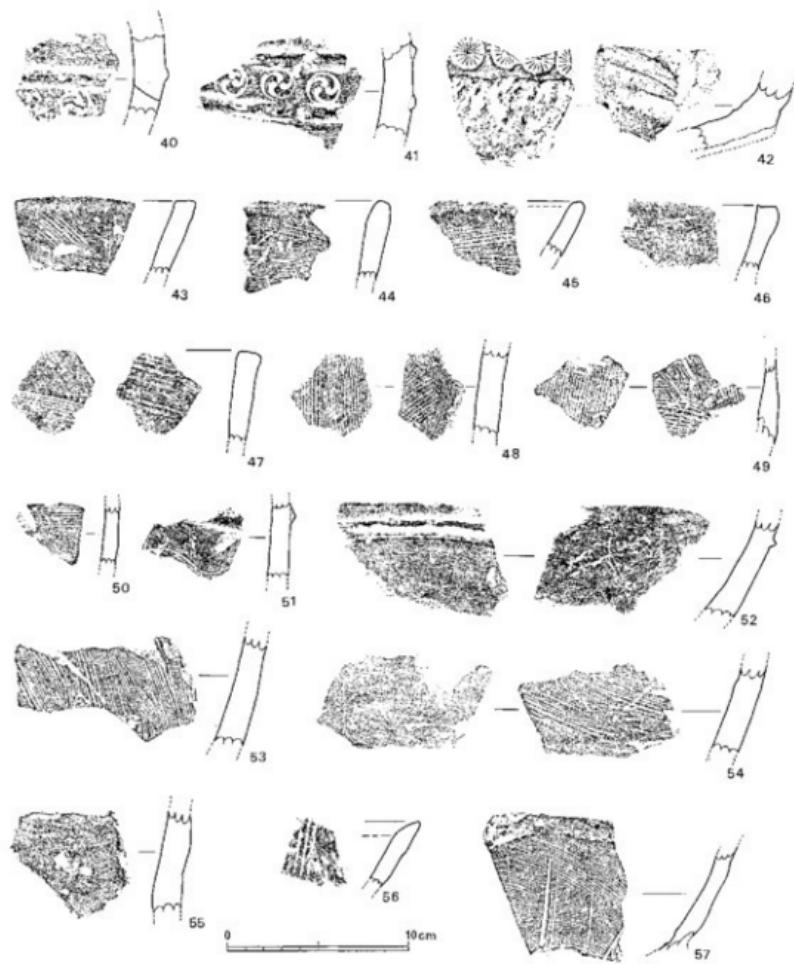
今回の調査で一番まとまって出土したのは、中世の遺構に付随して出土した遺物で、須恵質土器・瓦質土器から土師器、陶器、磁器と種類多く、国外産も含まれる。

須恵質土器（第10図27～39）

ここにあげたものは壺形土器である。27は頸部が短く、口縁は大きく外に開く。外面にはわずかに叩き痕が残る。口縁内面はナデ、屈曲部は箝削りのあとナデられている。28～34は玉縁口縁を有し、頸部が若干長くなり胴部が丸く張り出す器形である。27よりも焼き締まっており、



第10図 中世の遺物実測図(須恵質土器)



第11図 中世の遺物実測図(瓦質土器)

自然釉のかかる部分もあり、内面はナデられ、屈曲部は削られている。33は器底がうすく仕上げられた口縁部分で内外に自然釉がかかる。古い時期の須恵器かもしれない。35～39は頸部から脇部にかけての部分である。35は外面に平行叩き、内面には同心円文の叩きがわずかに見られる。36は31の器形とほぼ同じで、胎土にはやや粗い砂粒が混入され、暗灰色を呈する。38は

外面に格子目叩きを有する破片である。27と同一の可能性が強い。

38については北有馬町今福遺跡において類似資料が出土している。今福遺跡では櫻万丈窯ではないかとされているが、亀山窯との指摘もある。なお本遺跡の甕形土器の生産地については特定は出来ていない。

瓦質土器（第11図40～57）

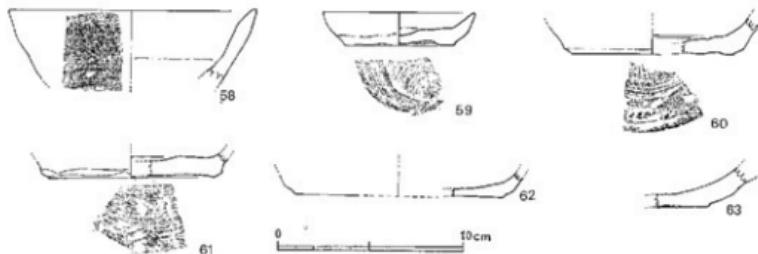
40～42は印刻文を有する火鉢である。40・41は巴文を付し、その上下に突帯が巡る。40は切り込み部が残り、脚つけ根の湾曲した部分と思われる。外面黄褐色、内面赤褐色を呈する。42は菊花文である。浅い火鉢の底部分で脚部と思われる接目の所で剝離している。胎土には微粒の滑石粉末が入り、内外とも黒色を呈する。43～50はこね鉢である。43～45は口縁部で内面に刷毛目調整痕が見える。また片面だけでなく両面に刷毛目が付けられているものもある。また50～54は内面に刷毛目が施されてこね鉢とも思えるが、断面が厚く突帯が巡るものもあり、火鉢の体部と考えられる。55・56はすり鉢である。56は焼成甘く消耗著しいが、内面タテに沈線が残る。56は外面が黒色に仕上げられ、内面は刷毛目調整のあと、鋭利な範様のものでタテに沈線が入れられている。胎土には滑石粉末が混じり焼成もよい。長崎県下における瓦質土器も、出土数量こそ少ないが、類例は増えつつある。九州横断自動車道関係の遺跡や今福遺跡から火鉢や風炉などが出土しているが、全体を復元するまでには至っていない。類例の増加が望まれるところである。

土師器（第12図58～63）

土師質土器の小破片は数多く認められるものの、原形に復するものは極めて少ない。58は壊である。底部を欠くが、体部は外に開き口縁端部は尖がり気味におさめられている。ロクロ整形によるナデのあとが明瞭に残る。58～63は皿である。底はすべて糸切り離しの痕が残る。59の暗褐色を除いて他は、黄褐色を呈し焼成も良好。

陶器および輸入陶磁器（第13図64～80）

陶器は量は多くないが、破片として残りはよい。64は備前焼のすり鉢口縁部である。内面に



第12図 中世の遺物実測図(土師器)



第13図 陶器および輸入陶磁器

は8本の沈線がわずかに残る。外面は口縁帯が付けられ体部と段で区分される。よく焼き締められ暗褐色を呈する。65～67は胴部が丸く張り出す壺である。細い沈線が数条通り、66のように波状になるものもある。堅緻に焼き締められ内外とも小豆色を呈し、自然釉が部分的にかかる。68は大壺の破片と思われる。よく焼き締めてあるが断面中央は均一に火が通っていない。外面は鉄釉が太い線で数条描かれている。おそらく中国産陶器と考えられる。69・70は内面は瓦質がかった焼きであるが、外面は小豆色の釉の上に自然釉が多くかかっている。産地不明。71は須恵質の焼きであるが、内面は自然釉が全面を覆う。断面は小豆色を呈する。平底で作りは雑である。72は平底の小破片であるが、内外に鉄釉がかけられ焼き締っている。この陶器も中国産と考えられる。73～75は中国産白磁碗である。うすくシャープに仕上がる。胎土は灰白色でわずかに黒い粒子が混じる。76・77は小破片で器形は不明であるが、明染付である。芭蕉葉文が口縁内面に描かれている。77は唐草状の文様で、表面にはやや乳濁した釉がかかる。78は小壺である。内面にも褐色の釉がかかり、口縁の内から外面全体には褐色釉の上に綠釉がかかる。肩の部分に突起が付く。輸入陶磁器と思われる。79・80季朝青磁碗底部である。79は淡灰褐色の釉が内外の全体に施され、高台部と底内面に砂目の痕が残る。胎土は軟質の感じである。80は青灰色で買入が見られる。胎土は灰色で堅緻である。輸入陶磁器はこの他にも量は多くないが、龍泉窯青磁片や、大目碗などが見られる。

石 鍋（第13図81）

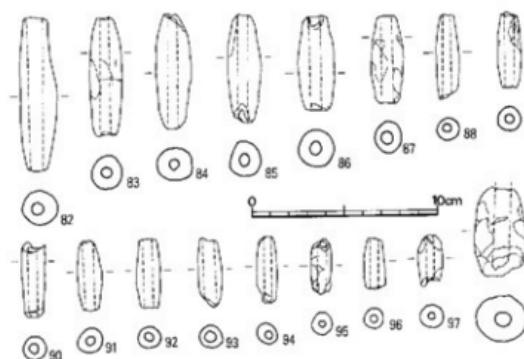
わずかに1点の出土である。良質の滑石を用いている。外面は削り痕が明瞭で全面黒色である。ほぼ底の部分で立ち上がりはゆるく湾曲している。滑石製石鍋は殆どの中世遺跡から出土しており、西彼杵半島が主な生産地である。

土 鍋（第14図82～98）

破片を含めると20個を越える管状土鍋が得られている。城跡は海に突出して立地しており、その点では漁業も盛んに行われていたと思われる。土鍋の殆どは網に使用されるもので、82や98を除いてはほぼ平均値を示すものといえる。

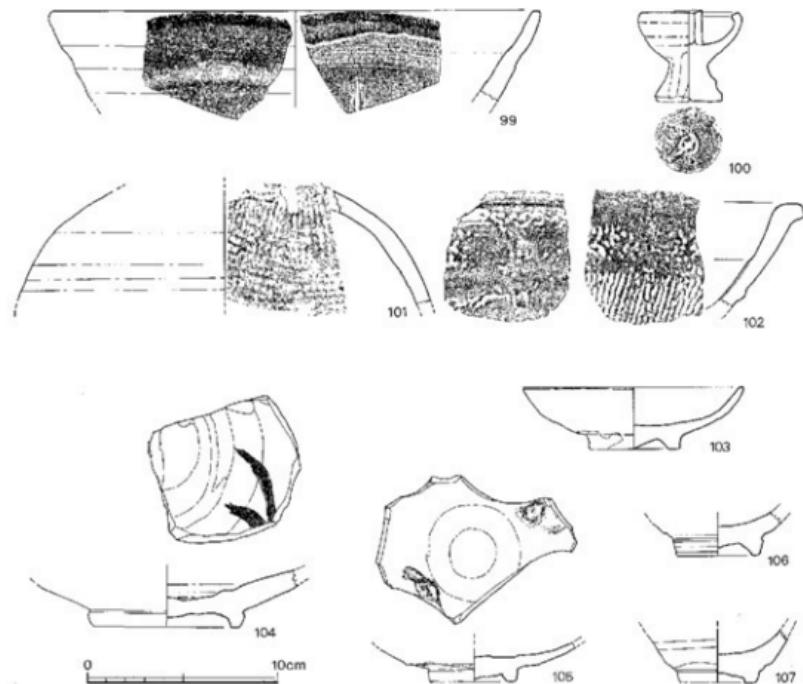
近世の遺物（第15図99～107）

近世陶磁器はI層から出土したものが多い。かつて方形に区画された窓の中央に祠が建てられ祀っていたが、別の場所に移転したという。そういう関係からかお供えとしての容器と思われる。64は焼き締った鉢の外面に暗褐色鉛色の釉を厚くかけ、内面には口縁にわずかにかけられている。沈線が2本わずかに残るが、すり鉢になるかもしれない。100は焼き締められた茶褐色の上に暗褐色の釉がかけられた燭台である。底の糸切り離しもよく残っている。釉からするとかなり新しいようである。101は壺の肩部分で、外面は濃褐色の釉がかかり、そのうえに自然釉も点々と見られる。内面は格子目叩きの痕が残り、褐色の釉がかかる。断面は小豆色に近い。102はすり鉢で、内面には厚い茶色の釉がかけられているが、のりが悪くぼってりとしている。



103は皿で高台に3箇所の砂目痕が残る。灰濁色の釉が厚くかかり、黒色の斑点が混じる。断面は暗灰色。104は唐津鉄絵皿である。高台が付き釉はかかるない。断面褐色。105は高台付皿で内外に鈴色の釉がかかり、内面には青緑色の釉が部分的にかかり、見込は蛇ノ目釉ハギである。106は高台付碗で内面に灰色の釉がかかる。

第14図 土鉢実測図



第15図 近世の遺物実測図

かり、貴人が見られる。107は浅い高台をもつ窓で内面には天目釉がかかる。焼はやや軟質で黄褐色。

IV まとめ

県下でも、最近になり中世遺跡の発掘調査例が増え、資料も増加し、比較検討されるようになってきた。本遺跡の場合は、東側の国見町に位置する神代城の支城を成すと考えられている。神代城は正和元年(1312年)以前に神代式部大輔貢益が築いたとされているが、実際には鎌倉期には居を構えていたと考えられる。しかし今まで発掘調査等は実施されておらず、年代の裏付けとされるようなものは得られていない。

そこで今回の尻無城の調査が重要な要素をもつのである。確かに神代城の支城といわれるよう規模にしても大きなものではないが、出土遺物からある程度の輪郭が見えてくる。まず遺構である。石垣状遺構としたが、これは段差をもつ縁辺部にあたっていたため、土留めの役割も果していると考えたためである。しかし実際には大體が一段積まれている程度で、小標が多いのである。裏込め石というより、敷き詰められている状況である。このような類例は、県下では松浦市櫻階田遺跡^{参1}や北有馬町今福遺跡の道路状遺構とされたものに類似しており、本例も石垣も併ね備えた道路状遺構の性格が強い。

遺物の面では、出土量は少ないが一応の器種は揃っている。中世に限って見れば、国内産の遺物は須恵質、瓦質土器が目立つが、時期的には14世紀以降と考えられる。在地七器以外の備前や桜井火窯と考えられるものもある。また輸入陶磁器は、わずかではあるが中国産と朝鮮産陶磁器が認められる。中国産白磁については12世紀と思われるものもあるが、青磁片は13世紀以降14世紀までのものが含まれるようである。

土器については小皿だけであるが、糸切り離し技法で、あまり大形化されておらず、14世紀前後が考えられると思う。従って、遺物は遺構中より得られた訳であり、石垣状の遺構もこの頃に比定されよう。また神代城の支城と考えられている点については異論ではなく、同時期に築城され、その消長についても同じ道をたどったと考えられよう。

今回の調査は城の中心からややはずれた地点であり、まだ中心部は国見町側の畠地として残されている。道路が開通したこと、さらに開発されることが懸念されるが、遺跡保護のための十分な配慮が必要である。

引用文献

- 註1 安楽勉・中田敦之編『櫻階田遺跡』長崎県文化財調査報告 第76集 1985
註2 宮崎貴夫・町田利幸編『今福遺跡III』長崎県文化財調査報告 第84集 1986

図版



遺跡遠景（東から）



遺跡近景（北から）

図版 2

(南から)



中世石垣状遺構検出状況（西から）

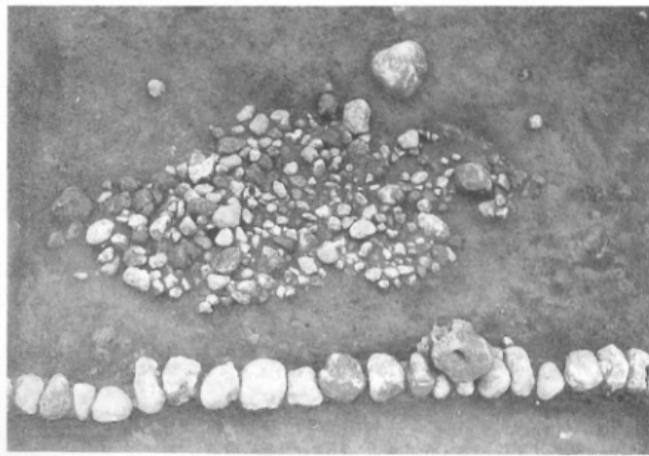


中世石垣状遺構検出状況（南から）

図版 4

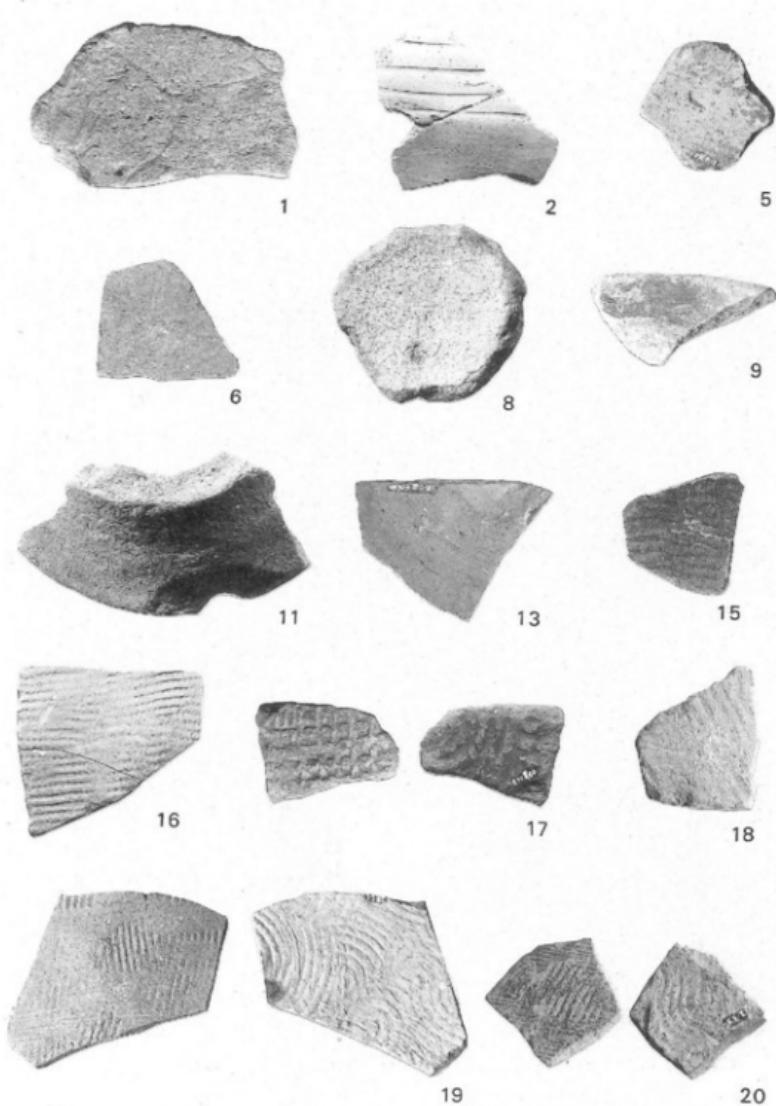


A区土層および遺物出土状況



B区近世遺構検出状況

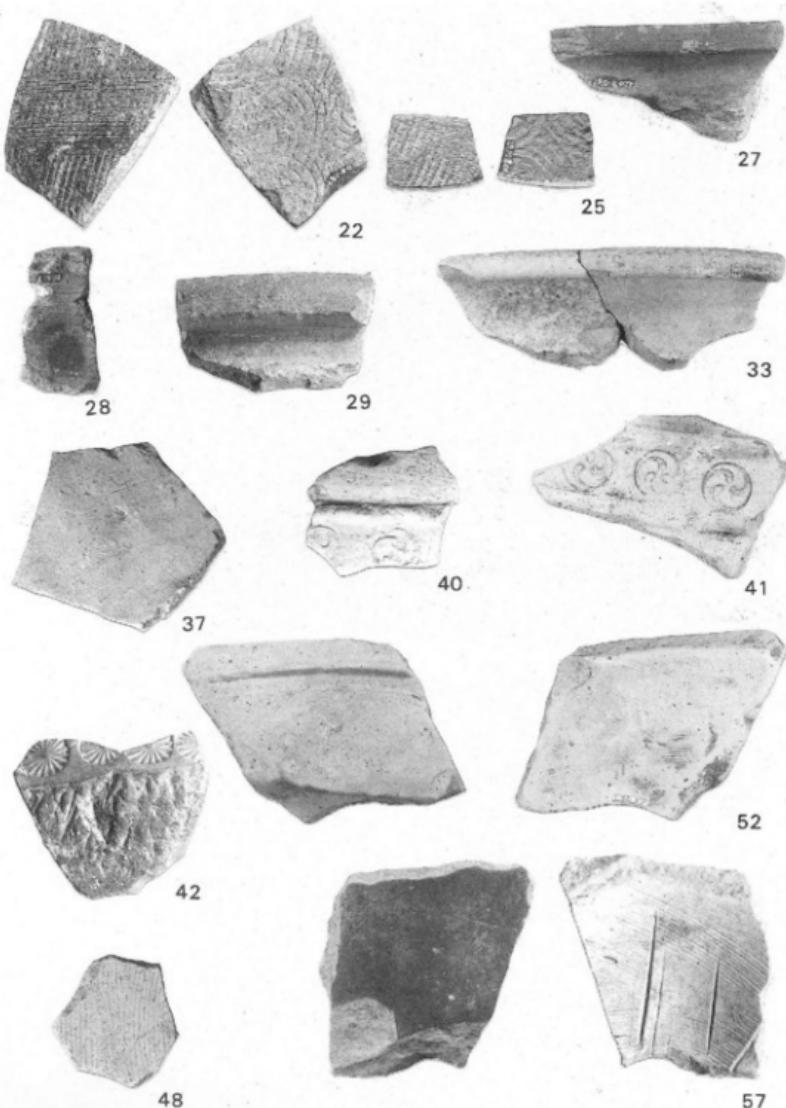
図版 5



出土 遺 物 ①

(番号は実測図に同じ)

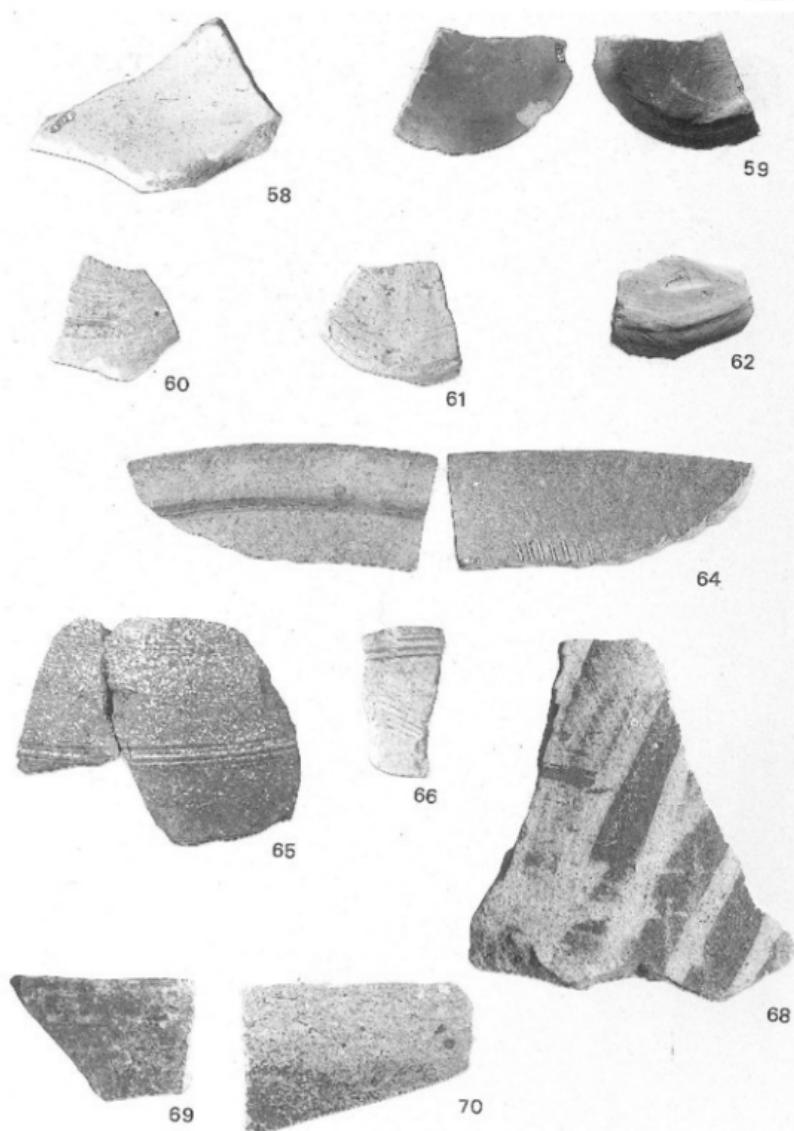
図版 6



出土遺物②

(番号は実測図に同じ)

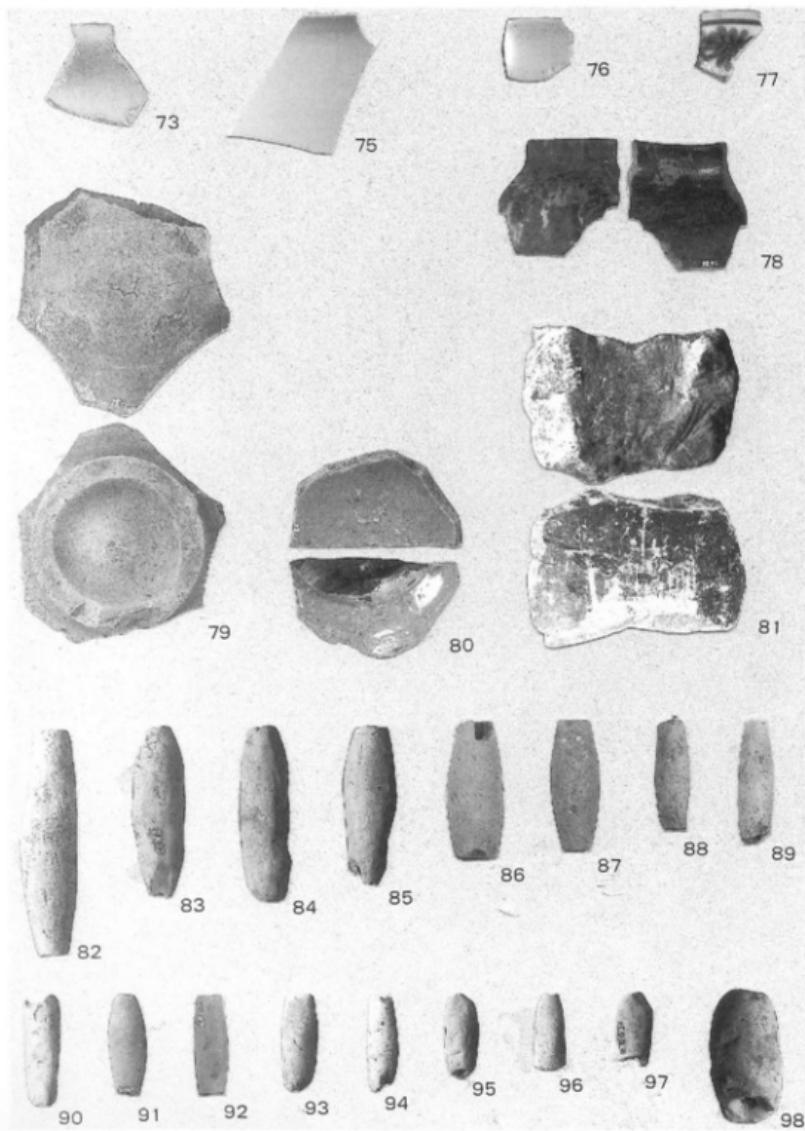
図版 7



出土遺物③

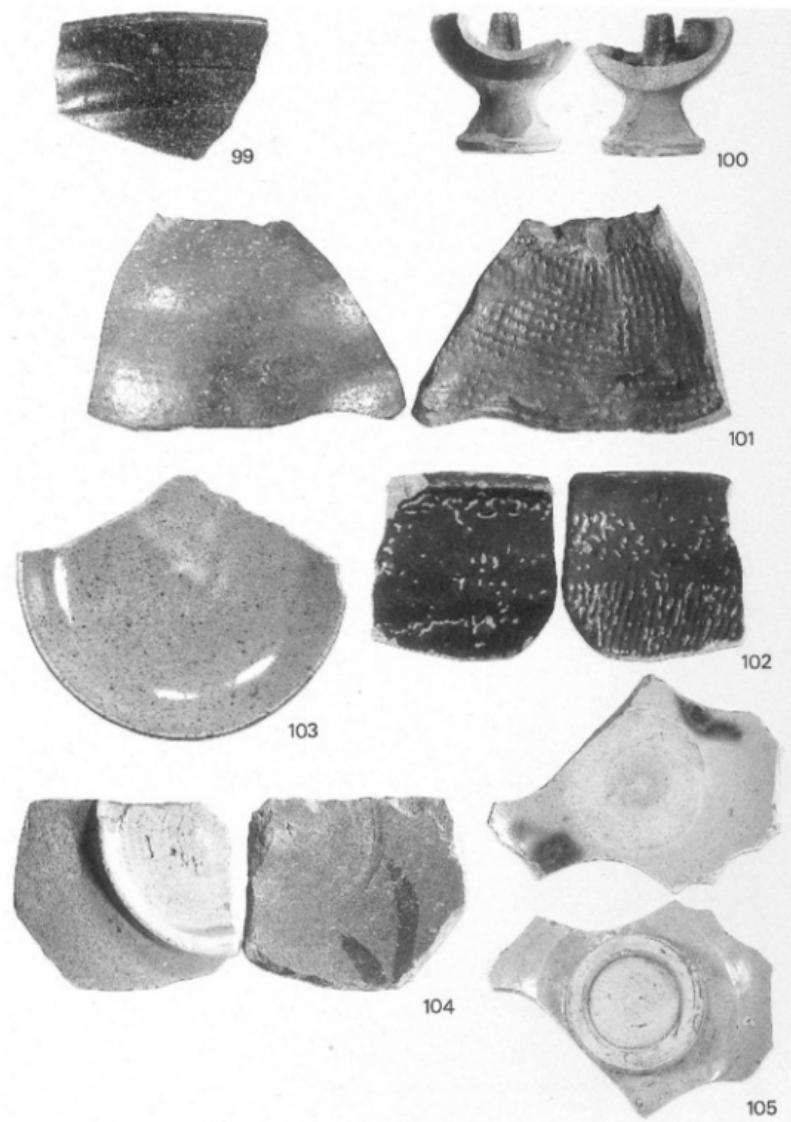
(番号は実測図に同じ)

図版 8



出土遺物④

(番号は実測図に同じ)



出土遺物 ⑤

(番号は実測図に同じ)

尻無城跡

平成3年(1991)3月30日発行
発行所 瑞穂町文化財保護協会

長崎県南高来郡瑞穂町西郷辛1060番地
(瑞穂町教育委員会内)
〒859-12 ☎0957-77-2125

印刷所 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007
〒854 ☎0957-22-6000
